

## 6-③サッカー分科会（研究報告）

2016.8.阿蘇大会支援東京大会

# サッカー、ラグビーの分離・成立の背景と 両組織の発展過程を比較する

船富公二（大阪支部）

### 1. はじめに

昨年の大阪大会のサッカー分科会において、参加者から私に出されました宿題は

①マズフットボールから、何故「手の使用を禁じた＝ボール操作の難しい」サッカーが生まれたのか？

②「手の使用を認める」ラグビーよりサッカーの方が全世界に広まったのは何故か？の2点でありました。

しかし、一つ目のサッカー誕生の経過についてから述べることにします。

### 2. 18世紀後半から19世紀初め＝パブリックスクールのフットボール

山本浩氏(注1)は、このころに行われていたフットボールは「…下級生いじめの手段となっていて、かなり乱暴なものであったが、ゲームのやり方は学校によってまちまちであった。」と、いくつかの学校の例を挙げています。サッカー、ラグビーの成立に関わりの深いイートン校、ハロー校、ラグビー校の当時のフットボールの様子を列記すると次のようになります。

**ハロー校：**丘の下の底のような水はけの悪い運動場＝ぬかるみで重くなったボールをドリブルし、キックすることがプレーの中

心で、タックルは禁止。キックしたボールをキャッチしたプレーヤーは3歩助走でフリーキック。ゴールライン上の2本の柱の間を通せば得点。

**イートン校：**①ウォールゲーム＝高さ2.5mのレンガ塀と塀から5.5m離れたところに塀と平行に引かれた線の間がフィールド。塀に寄りかかるようにして組むスクラムやキックでボールを進める。

②広い運動場で四隅に棒を立てるだけ、タッチラインはなし。プレーの中心はロングキックとスクラム。2本の柱の間に蹴り込めば得点。またゴールラインの向こう側の地面にボールを抱えてタッチするとゴールを狙ってボールを蹴ることができる（現在のラグビールールとよく似ている）。

**ラグビー校：**ゴールラインにはファッグと呼ばれる下級生を並べた。ボールを抱えてゴール目指して走ることは禁止。ハッキングは茶飯事であったが、取っ組み合いはなかった。（この頃はラグビー校のフットボールは、ラグビーより現在のサッカーに似ていた。）

### 3. 成文化ルールのねじれ現象

1845年にラグビー校、47年にイー

トン校がフットボールルールを成文化しています。(資料1) その共通点としては「クリスチャンジェントルマン」の養成を念頭においたもので、①学校が生徒に作成を依頼し生徒が主体的に作ったものであること。②フェアプレー精神に貫かれていること。③暴力行為を禁止または制限していること。などがあげられます。

しかし両校のルールには、「ランニング・イン(ボールを持って走る)」を認めるか否かで大きく分かれました。しかも、ラグビー校は「ランニング・イン」を認め、イートン校は「フェアキャッチ」以外の手の使用を禁じたものになっています。1800年当初のルール＝「子どもの遊び」としてのフットボール(ルール)とは、双方にねじれの現象が起こっています。

#### 4. ラグビー校エリス少年伝説

ラグビー校のルールの変化は30年を挟んだ20年ほどの間に起こっているようですが、一般には「エリス少年がゲーム中、夢中になりボールを抱えて走り出した」ことを起源とする「エリス少年説」が有名です。これについては後に触れますが、「エッセ伝説」であるようです。

#### 5. 成文化の背景

最初に成文化したのはラグビー校ですが、学校側からの依頼で3名の生徒によってなされています。

しかし、パブリックスクールの子どもの勝手な遊び(含む＝下級生いじめ)のルールを学校側が何故子どもたちに成文化するよう命じたのでしょうか。その必要性を、鉄道の発達で地方から入学者が増え地

方ごとに異なるフットボールルールで子どもたちが困ったことに作成の理由を求める(中村敏雄氏注2)のでは説得力に欠けます。当時の政治的・経済的背景から捉えることが必要です。拙稿でも述べていますので箇条書きで示します。

①1800年代のイギリスは産業革命によって、新興ブルジョアジーが台頭し、地主階級との間で主導権争いが行われていたが、植民地からの利益(国債・投資)で潤った地主階級がイギリス議会(政治)の多数派を維持し続け、文化的にも「ジェントルマン像」を作り上げ、これに新興ブルジョアジーをも包摂していた。(資料2・3・4)

②パブリックスクールは「ジェントルマン」を養成する学校と変貌し、「ジェットリーの家柄」を求めたブルジョアジーの師弟もパブリックスクールに通わせるようになる。そして空前のパブリックスクール「ブーム」がおこる。(資料5)

③スクール内では、上級生による下級生いじめ、暴力事件、が多発していたが、「9'S」(有名私立校9校)の学校側は「将来の支配者＝(紳士道)養成の訓練の場」として、それを容認していた。

④ブルジョアジーの学校改革を要求する声が高まり社会問題化するなか、「9'S」のなかでは比較的新しく、ブルジョアジーの師弟を優先的に受け入れていたラグビー校(豪商が創設)が学校改革を断行する。(③用資料6)

#### 6. アーノルド校長の学校改革

1828年から1842年まで校長を務めたトーマス・アーノルド(42年に突然死)の行った学校改革について詳しく述べる紙面はありませんが、多くのパブリックスクールの改革の模範となりました。

改革の方法として特筆すべきは、生徒組

織における最上級生の権威を公式に認め、ルールある学校づくりに最上級生を主体的に取り組みさせたことでした。

「・・・団体スポーツとくにフットボールをとおして生徒の心身を鍛練する・・・」(注1)) ために、「フットボール」を「もっとコントロールされた秩序あるもの」(同)にするために、「リーダー格の生徒たちに対して、」ルールを「変えていくように指導した」(同) のです。

ラグビー校において、ボールを抱えて走ることを禁じていた1800年当初のフットボールルールが30年代を挟む20年間に「ランニング・イン」を認めるまでに変貌したのもアーノルド校長の学校改革と関連づけて捉えることが大切と思われま

#### 7. イートン校の「対ラグビー校」意識

1800年当初は現在のラグビーによく似たルールのフットボールをしていたイートン校が、1847年の成文化ルールでは「手の使用」を禁じ、サッカーへの道を歩み始めるのです。

これは、ラグビー校の学校改革が高く評価(1839年にはアデレイド皇太后がラグビー校を訪問し、フットボール・ゲームを観戦など注2)されていることに対する名門イートン校の対抗心が、ラグビー校と異なるルールを作らせたと思われま

す。フットボールの成文化は、そもそもパブリックスクールの教育改革の過程でうまれてきたものであり、生徒の心身の鍛練のためにルールも変更されてきたのであって、その意味ではラグビー校の変更の流れが本流と言えるのです。

19世紀後半のパブリックスクールにお

いては、ラグビー校方式のルールを採用する学校が多かったことがそれを物語っています。(注2)(資料7)

#### 8. サッカーの方が世界に広まったわけ

①イートン校ルールが時代に合っていた  
フットボールのルールを統括する組織をつくるために、1863年10月26日にバーンズフットボール・クラブのE.C.モーリーの呼びかけで11のクラブ代表があつまり、フットボール・アソシエーション(F.A.)の設立を決めています。「希望するクラブはすべて加盟でき、1ギニーの会費を納入することによって会員資格を1年ごとに更新できる」(注1) ことになっていました。

そして12月8日の会議に於いて「ランニングインとハッキング」を認めないルールが採用されました。

ブラックヒース・クラブの代表は、ハッキングこそは、「フットボールの真の形式」であり、「もしハッキングを禁止するなら、フットボールという競技がもつ**勇敢さと気力**をことごとく奪ってしまうだろう。」(注1)と主張したのに対し、名誉幹事のモーリーは「思慮分別のある年齢になった人は誰でも、ハッキングのあるフットボールなどしな

いと思う。」(同)と述べ、ハッキング禁止派に賛成票を投じました。  
時代は、家族を養っていくために毎日すべき仕事があつて、自分の身体心配は自分でしなければならぬ社会人がプレーするのにふさわしいフットボール=仕事の妨げにならないフットボールを要求していると受け取れる発言でした。

## ②プロ化要求への対応の相違

1871年にR.U.F.が結成されますが、その後、両フットボールは鉄道が発達ともあいまって急速に広まり、特にイングランド北部の労働者や教会の中に1000を超える組織ができたようで、諸々の大会（トーナメント・リーグ）が開かれるようになります。

キリスト教との関係もあり試合は日曜日を避けた日に行われたようで、仕事を休んでゲームに出た選手（労働者）は生活費を要求するようになります。怪我をした労働者は治療費や非就労保障を要求するようにもなります。

しかし、組織の幹部はアマチュアイズム（資料8・9）を盾にお金の遣り取りを禁止しますから、分裂の危機が生じます。

F.A.理事たちは分裂回避を優先して渋々「プロ化」を容認します。

しかし、R.U.F.の理事たちはプロ化を拒否しつづけ、大半のクラブが脱退し地域ごとにたくさんの独自ルールをもつプロ組織が誕生します。

少数派に転落したR.U.F.幹部は組織の「正当性」を主張するために「エリス少年伝説」を活用（作成？）し、1900年にラグビー校の校庭に「エリス少年を称える銘板」を作るのです。

## 10. 異なる選択の背景

「プロ化」を受け入れたF.A.の幹部はジェントリーたちでした。工業化が進み台頭するブルジョアジーとの対立を回避（譲歩）することで支配的地位を確保し続けてきたジェントリーにとって、F.A.の分裂回避も同じ「譲歩」であったと、考えられます。

一方R.U.F.の幹部はブルジョアジーで、「プロ化」の要求元の労働者は「労使」対決（労働争議）の相手でもあったために簡単に要求を受け入れることが出来なかったと考えられます。

「プロ化」を受け入れたF.A.式フットボールは労働者、大衆、庶民に受け入れられ、イングランドの国民的スポーツになっていきます。一方R.U.F.式フットボールは上流階層に広まっていったようです。

F.A.式フットボールはルールを統括する組織が単一の状態で世界に発信されます。その後も「アマチュア規定」をめぐって、英国4FAがFIFAから脱退したときも決して別組織を作ることはなかったのです。

一方、統括組織でなくなったR.U.F.式フットボールもパブリックスクールOBによって精力的に発信されますが、一般大衆への普及力においては、FA式に及ばなかったようです。

しかし、イングランドからの移民者が多いオーストラリアには、現在3つのラグビー組織があり、人気はオーストラリア・フットボール、ラグビーリーグ、ラグビーユニオンの順であります。どの組織もFA式フットボールよりも多くの観戦者数を集めています。（注3）

（注1）：「フットボールの文化史」山本浩（ちくま新書）

（注2）：「スポーツルール学への序章」（p94～ルールの成文化）中村敏雄（大修館書店）

（注3）：「オーストラリアにおける『ラグビー』の拡大と分裂」尾崎正峰（一橋大学）

他の参考文献は、拙稿「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」の参考文献と同じ

資料1 フットボール・ルールの成文化（年代と項目数）

学校・クラブの名称	年代	項目数	学校・クラブの名称	年代	項目数
ラグビー	1845	11	シェフィールド・クラブ	1857	11
イートン	1847	10	アピングム	1859	10
ケンブリッジ大学	1848	11	チャーターハウス	1860年代	7
ハロー	1853	21	ウィンチェスター	1863	13
ウェストミンスター	1850年代	9	フットボール協会	1863	14

中村敏雄「スポーツルールの成文化」p 99 (I.R.モアによる) から

資料2 拙稿「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」より」

4. ジェントリーの支配権維持の手法＝イギリスの交通手段の発達を例に

①一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、基礎に碎石を敷きその上に細かな石をかぶせ、その表面にコールタールやアスファルトで覆う舗装術が編み出され、これによって急行便馬車が発達した。これらの舗装道路はジェントリーの私有地で彼らは使用料を取って儲けることができた。

この時期、運河建設も行われた。三代目のブリッジウォーター公爵フランシス・ヘンリーは、石炭の産地である領地のワーズリーからマンチェスターまでの運河を通すことに成功した。谷を渡るのにローマの水道橋を応用するなどの大工事の末に成功した。これによって、小麦価格は九割も安く、石炭価格にいたっては小麦以上に安価となり、ヘンリーは石炭の販売でも、運河使用料でも大儲けした。

他の貴族やジェントリー層もこれにあやかろうとして運河建設ラッシュがおこり、一時は運河の総距離が三〇〇〇マイルにまで及んだ。

鉄道建設も進められた。一八二五年ストックトン・アンド・ダーリントン鉄道は、レールの賃料を取る目的でつくられた。鉄道という意味では新しいが、地代を稼ぐ目的という意味では道路や運河と大差はなかった。

しかし、新興ブルジョアジーは、一八三〇年にイングランド最大の港リヴァプールから大工業地マンチェスターまでの本格的鉄道建設を議会に申請した。貴族ジェントリーにとっては、これまでの利権が奪われる（地代がはいらなくなる）ことであり、当初は猛反対し、ブルジョアジーとの間で抗争が起こる。抗争は選挙法改正問題とあいまって激烈になる。両者の抗争は穀物法撤廃問題（ブルジョアジーは自由貿易を主張）でもおこり、一八二〇年代後半から三〇年代は議会を支配していた貴族・ジェントリー側の譲歩で落ち着するが、これ以降も鉄道建設は飛躍的（四〇年代には国内全域）に伸びた。

②何故「譲歩したのか、譲歩できたのか」

鉄道の発達によって利権収入を失った中小地主、穀物の輸入の自由化・穀物価格の下落によって農業経営が破綻する中小の農業経営者たちは没落したが、大地主（貴族・ジェントリー）は、国債や植民地への投資による利息で潤い、没落した地主の土地をも買い取り、より広大な

土地を持つことで、危機を乗り切ることができたし、大農業経営者も大規模化と生産性の向上で乗り切ることができたのである。

一七八九年のフランス革命の教訓もあり、新興ブルジョアジーと敵対するのではなく、没落した中小地主の土地を新興ブルジョアジーに買い取らせ、新たなジェントリーとして、自陣に取り込むことで支配権を維持しようとしたのである。

### 資料 3

#### ジェントルマン支配の安全装置

フランスでは特権階級の貴族による支配はフランス革命で崩れた。しかし、イギリスでは貴族はジェントルマンとして生き残り、長く上院議員になれるなどの特権を保持した。フランスでは滅び、イギリスではなぜ生き残ったのか。フランスの貴族は第二身分という「身分」であり固定化されていて、第三身分の者が大金持ちになったから貴族になるということは原則として無く、貴族はどんなに貧しくとも貴族であるという固い構造になっていた。ところがイギリスの貴族は数が極端に少なく、またジェントリと同じくジェントルマンと言われるようになっていた。ジェントリ階層の大部分のジェントリは平民であるから、ジェントルマンでない人も努力し運が良ければそれになれたし、ジェントルマンでも働かなければならないほど貧しくなれば、それはジェントルマンではなくなるという、柔軟な構造であった。フランスでは貴族支配に不満な第三身分は貴族階級を倒すしかなかったのに対して、イギリスではジェントルマンなろうとした人は沢山いても、それを倒そうとした人は少なかったのではないか。

ジェントルマンの次男や三男にはジェントルマンから転落する危惧が常にあったが、彼らの受け皿となり、ジェントルマン支配の安全弁となったのが植民地であった。彼らは植民地に行って現地の高級官僚になるか、農園の経営か貿易で成功するかということによってジェントルマンの地位を確保した。またジェントルマンでない若者も、野心を持って植民地に渡り成功してジェントルマンになると言う途があった。<川北稔『イギリス近代史講義』2010 講談社現代新書 p.149-150 >

### 資料 4

英国における産業開発の特徴は伝統的に「新しい産業は常に新しい人脈が手掛けてきた」点にある。その一方で経済的に成功すると叙勲されたり政略結婚で絡め取られたりして、たちまちジェントリー仲間に加えられてしまうから階級的矛盾が発生する余地がない。「保守主義の父」エドマンド・バーク (Edmund Burke、1729年～1797年)も(Reflecti「フランス革命の省察 ons on the Revolution in France、1790年」)の中で「フランスで革命が起こったのは、成功したブルジョワを貴族に引き上げず放置しておいたからだ」と断言している。

資料5（拙稿）「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」

②パブリック・スクールの成り立ちと変遷

パブリック・スクールの起源は中世のグラマースクールに遡るが、これらの学校の中で王侯貴族や金持ちの基金をもとにした学校があらわれ、これら基金立学校は詳細な規則のもとに運営されており、一定数の貧しい少年を無償または安い授業料で入学させることを義務づけていた。

また、教師の給与についても決められていたが、インフレを考慮していなかったので実質給与は著しく低くなり、インフレを考慮していなかったので実質給与は著しく低くなり、その改善のために私費制をとることになった。一六世紀にはもう私費制の方が多くなり、一七世紀には、これまで邸宅に家庭教師を雇って教育していた貴族やジェントリー（地主階級）が子弟をこれらの学校に行かせ始めるようになり、パブリック・スクールは上流階級のための学校という意味になる。

一九世紀になると、産業ブルジョアジーや専門職が増え、彼らは子弟の教育のためこのような学校を求めた。特に、五〇年以降の土地の高騰で土地を購入できなくなった彼らは「疑似ジェントルマン」としてのパブリック・スクール「OB」を得ようとした。そして、既存校をモデルにした寄宿制の学校が空前のブームとなる。

資料6（拙稿）「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」

③プリーフェクト＝ファッグ制度

パブリックスクールには、最上級生（シックスズ・フォーム）の中から任命された生徒にプリーフェクト（＝監督生、スクールによってはプリポスターと言う）生として、学校の風紀や秩序維持の仕事と権限を与えていた。

また、上級生がファッグと呼ばれる下級生に靴磨き、部屋の掃除、紅茶の準備といった私的な雑用をさせる習慣があり、言いつけ通りにしないファッグには暴力的な制裁を加えるのが普通であり、この制裁手段にフットボールが利用された。

そして、一九世紀前半にはこの監督生が中心となるケンカや暴動が多発し、一八二五年にはシャフツベリー卿の息子が命を落とす事件まで起き、スクール改革が望まれるようになる。

資料8 拙稿「近代スポーツ＝サッカーの誕生の社会的背景」より

①アマチュアイズム

パブリック・スクールの卒業生にとって、ラグビーにしるサッカーにしる、スポーツというのはあくまでもアマチュアの楽しみだったのである。

アマチュアとは、金銭のためにスポーツをするのではない人を意味するだけでなく、スポーツを楽しむ中・上流のジェントルマンをも意味した。

さらに、アマチュアは、フェアプレーを何よりも大切にすることでもあった。アマチュアが重視するフェアプレーというのは、ルールを守ることだけを意味するのではなく、

相手と対等の立場でゲームをするということであり、明らかに有利な立場に立って相手を出し抜くのはフェアプレーがもっとも嫌うことであった。

アマチュア精神のもう一つの特徴は、アマチュアであるジェントルマンは、あくまでも余暇の楽しみとしてスポーツをするということである。勝つためにありったけの力を振り絞ったり、練習に明け暮れるのもアマチュアではないのである。

資料9 小林章夫「イギリス精神 紳士の国のダンディズム」より

p 80 アマチュアとは何か

ところでアマチュア(amateur)という言葉は、そのスペリング、発音からも予測がつくように本来はラテン語で「愛する」を意味する言葉に由来し、18世紀末にイギリスではじめてこのアマチュアという言葉が使われたときは、単に「を愛する人、好む人」の意味だった。そして19世紀初頭になると、「なにかをひまつぶしとしておこなう人」の意味になり、いわゆる「プロフェッショナル」、つまり職業(プロフェッション)としてなにかをおこなう人間と区別されるようになったのである。

p 81 ……なかにはこの余技が相当のレベルにまで達する人間がいて、たとえば囲碁でプロの高段者を破ったりすると「玄人(くろうと)はだし」だといわれることとなる。つまりプロに近い、職業にしてもひょっとするとなんとかなるレベルに達したというわけだ。したがってこの領域に到達したアマチュアは、プロフェッショナルと実質的にはほとんど変わらないといえるのだ。それでもこの紙一重が重要な意味をもつのであって、主たる生活手段が余技以外にあるかないかという点はプロとアマチュアを区別する大きなポイントなのである。

p107 ジェントルマン・アマチュアの登場

今日、アマチュアという言葉がもっともよく使われる分野はスポーツの世界である。ところでこのスポーツという言葉も、その本来の意味は「気晴らし」や「娯楽」「余暇」ということで、特に17、18世紀の紳士たちにとってスポーツといえば広大な領地内でおこなわれる狩猟や乗馬、あるいは釣りなどを意味していた。

ところが18世紀末頃から一般庶民や労働者たちの時間的余裕、経済的余裕が生じるようになると、スポーツを愛好することがふえてくる。しかしながら彼らには上流階級と同じように狩猟を楽しむだけのゆとりはなかったもので、これにかわってサッカーなどが人気のあるスポーツとなる。同時にこうしたスポーツは、大英帝国の発展とともに文化的輸出品となって世界への広まっていった。

…スポーツが大衆レベルにまで浸透しはじめると、これまではスポーツを楽しむことが特権であった上流階級の人々が、自分たちの階層と一般の人々とを区別するために、自らを「ジェントルマン・アマチュア」と呼ぶようになる。つまり明らかな差別意識のあらわれとして、アマチュアという言葉が使われることになるのである。

その具体的な形は19世紀半ばにはさらに顕著になり、スポーツ・クラブを結成して会員だ

けが競技会に参加できるという排他性が生まれたり、あるいは職業による差別がはっきりとあらわれてくる。

p108 さらに1866年におこなわれた「全英陸上競技選手権」では、先に引用した30年近く前の「ヘンリー・レガッタ」(ボートレース)の参加規定が踏襲されて、次のようなアマチュア規定が定められることになる。

かつて賞金目当てにプロフェッショナルと一緒に、あるいはこれに対抗して競技したもの。生活費を得るために競技の如何を問わず、練習を教えたり、それを仕事としたり、手伝いをしたことがあるもの、手先の訓練を必要とする職業、あるいは雇用者としての機械工、職工、あるいは労働者。これらはアマチュアとは認めない。

p109 だが同時に、このような背景をもつアマチュアという語が、イギリス紳士のエトス(道徳観)を如実に体现するものであったことも忘れてはなるまい。1909年にあるイギリス人が述べた次の言葉はそのあたりの事情をよく物語っている。

上流階級の人々にはある特徴が認められる。紳士階級に生まれた人々は、ある特定の義務感と階級観念をもつようになる。彼らは幅広い教養をもち、広い心で、さまざまな活動に携われることを期待される。金もうけに関わることも、なにかの専門家になることも許されない。専門家はブルジョワ階級のものであって、彼らには無縁である。

このように人間はいろいろな関心をもち、いろいろな能力を養うべきというイギリス紳士の伝統的考え方は、たしかに大衆との間に一線を画そうというエリート意識のあらわれにはなっているけれど、同時に純粋にスポーツを愛し、楽しむ人間としてのアマチュアリズムを育てる一因になったのであり、しかもそうした考えは紳士の自己の手本としてとらえるイギリス人一般の精神にも影響を与えずにはおこななかったのである。「ジェントルマン・アマチュア」という言葉は、まさにその点を如実に示すものだと考えられるかもしれない。

## ジェントルマン資本主義 ネットより

イギリス資本主義の特質を、ジェントルマンによる金融・サービス業などの発展にあるとする見方。

イギリス資本主義の特色を、産業革命に始まる工業化と製造業の発展を中心に理解するのではなく、ジェントルマンと言われる地主・貴族層が担っていた農業資本主義の発展と、彼らによるロンドンのシティを中心とする金融・サービス業が合体した「ジェントルマン資本主義(Gentlemanly Capitalism)」に重きを置く考え方が有力になっている。それはイギリスの歴史家ケインとホプキンスが『ジェントルマン資本主義の帝国』(邦訳1997)で提唱した新学説であり、イギリス史の視点としては常識化しているという。<以下、川北稔・木畑洋一編『イギリスの歴史 帝国=コモンウェルスのあゆみ』2000 有斐閣アルマによる> → 18世紀のイギリス

## 産業革命の相対化

その考え方では、産業革命はイギリス資本主義の成立の絶対的条件ではなく、相対化される。イギリス経済の中では、「モノ」づくりに携わる工業・製造業よりも、「カネ」を扱う金融・サービス部門が優位に立っていたのであり、地域的にはイングランド北西部の工業地帯よりも、ロンドンのシティとイングランド南東部で経済的繁栄と富の蓄積が大きかったと指摘している。また、この新しい学説では、イギリスの海外膨張と帝国主義の原因を、本国側の経済的要因に求め、イギリス国内史と帝国史を共通の枠組みで理解しようとしている。

### 19世紀のジェントルマン

イギリス近代史にとって、産業革命に象徴される製造工業は、全体としてはあまり重要ではない。むしろ、地主や証券保有者で、19世紀以降は主にパブリック・スクールと呼ばれる特別の私立学校からオクスフォード、ケンブリッジ両大学や、ロンドンに4つあった法律家を養成するための高等法学院（インズ・オヴ・コート）などに進学し、教育を受けたジェントルマンたちの活動こそが、イギリス経済を支えてきたのだというのである。いいかえれば、金融やサービスの活動こそが、イギリス近代経済の本質だという見方である。

### ジェントルマンの政治的優位

ジェントルマンの政治的優越も明確で、18～19世紀を通じて、上院は当然ジェントルマンの上流である貴族に独占され、下院議員の大半はジェントルマンのうちの貴族ではない平民身分のジェントリが占めていた。実は、マンチェスターなどの産業資本家、いわゆるブルジョワは議会で主力となることはなかった。19世紀前半の穀物法の廃止などの自由貿易主義を実現させた自由主義的改革も、産業資本家の要求ではあったが、それを実現したのはジェントルマンの力だったのである。

### 「世界の工場」から「世界の銀行」へ

また、かつてイギリスは「世界で最初の産業革命」を達成し、工業化の最先端を行く「世界の工場」といわれたが、イギリスが工業生産の側面で世界の先頭を切っていた時期はほんのわずかであった。そして実は19世紀のイギリスは商品貿易では膨大な赤字を抱えており、それを国際金融と海運を含むサービスの分野での大幅な黒字で補填していた。つまり、18世紀のジェントルマンがその資産を民衆に貸し付けることで利子所得を得ていたのが、19世紀にはロンドンのシティの金融界で成功した人々がジェントルマンと見なされ、彼らが海外に投資して世界経済を支配するという「世界の銀行」としてより強く長い影響力を保った。工業力ではアメリカやドイツに追い抜かれても、ロンドンのシティが世界経済の中心であり続けた。

## 世界恐慌とジェントルマン資本主義

イギリス資本主義経済は、第一次世界大戦を契機として世界経済の主導権をアメリカに

奪われて停滞が始まり、世界恐慌がおこると保護貿易主義に転換し、またオタワ連邦経済会議で帝国内の自治領（ドミノン）との特惠関税を設けるとともに、閉鎖的なスターリング＝ブロックというポンド経済圏を設けていわゆるブロック経済を構築して世界経済への影響録を力を失った、とされているが、最近ではロンドンのシティを中心とした金融やサービス部門のジェントルマン資本主義の伝統は存続しており、世界経済への主導権を失ってはいなかった、との見解が出されている。＜川北稔・木畑編 上掲書／秋田茂『イギリス帝国の歴史 アジアから考える』2012 中公新書 p.207->

資料7 フットボールの棲み分け 中村敏雄「スポーツルール学への序章」19 C後半の  
パブリックスクールのスポーツより作成

学校名	フットボール			学校名	フットボール		
	イートン型	ラグビー型	自校型		イートン型	ラグビー型	自校型
Bedford Grammar School		○		Loretto			○
Blair Lodge		○		Malvern	○		
Blumdell's School Tiverton		○		Marlborough		○	
Bradfield College	○			██████████		○	
██████████	○			Merchiston		○	
Cheltenham		○		Radley	○		
Christcllege,Brecon		○		Repton	○		
Christ's Hospital		○		Rossall	○		
City of London School	○			Royal High School E drburgh		○	
Clifton		○		██████████		○	
Dulwich College		○		Sedbergh		○	
Edinburgh Academy		○		Sherborne		○	
██████████	○		○	██████████	○		
Fettes		○		██████████		○	
Giggleswick School		○		Tonbridge		○	
Glenalmond,Trinity College		○		University College School		○	
Haileybury		○		Uppingam		○	
██████████			○	Warwick		○	
King's College School		○		Wellington		○	
Lancing	○			██████████	○		
Llandovery		○		██████████			○